

## 日本の翻訳: 変化の表れた 1970 年代 Japanese translation in the 1970s: A transitional period

古野ゆり

(クイーンズランド大学・語学比較文化研究学科)

*This paper investigates changes in the attitudes of translators towards faithfulness to the original text and towards the readability of non-fiction English-Japanese translations in Japan during the 1970s. Specifically, it adopts the framework of translation norms proposed by Gideon Toury (1995), who advocates a socio-cultural approach to translation and focuses on the initial norms of 'acceptability' and 'adequacy'. Although Japanese translators had previously been more concerned with fidelity and literal translation, from the 1970s onward they were becoming more concerned with conforming to Japanese cultural and linguistic norms, perhaps in response to changing expectations towards translations on the part of readers. This trend of adhering to 'acceptability' continued to gain increasing popularity into the following decades, although the older norm of 'adequacy' still persisted.*

### 1. はじめに

日本は戦前戦後を通じて直訳調の読みにくい文章でも翻訳として受け入れてきた。つまり翻訳者は読者になじみのない外国語的な表現を原文に忠実に直訳するだけで、日本語本来の自然な表現に直さなくても通用した。しかし戦後 30 年以上が経過して、日本が経済的にも世界のトップ・レベルに近づいた 1970 年代頃から「原文に逐一忠実なだけで、日本語として不自然で分かりにくい翻訳は受け入れられない。もっと読者の側に立って、日本語として自然な翻訳を目指すべきだ。」(別宮 1975、河野 1975、中村 1973) という声が多くあがるようになった。さらに誤訳の指摘などだけでなく、文化的・言語的立場から翻訳が論議されるようになってきた。

---

FURUNO Yuri, "Japanese translation in the 1970s: A transitional period."

*Interpretation Studies*, No. 2, December 2002, pages 114-122.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

本文は、「社会・文化・歴史的な観点から翻訳を記述的に学ぶ」イスラエルの学者 Gideon Toury (1995) の「翻訳ノーム」の概念に基づいている。ノームの中でも基本的な相対するノーム、すなわち *adequacy* (原文の文化と言語の特徴を最大限に訳出する場合) と *acceptability* (翻訳読者の属する言語・文化に訳文を最大限合わせる場合) とを論述の枠組みとして話を進める。ノームの概念は翻訳についてだけでなく、通訳理論にも運用可能であり、実際にこの理論を使った論文がいくつか発表されているので参照されたい (例: Harris 1990)。

具体的な研究方法としては、1970年代当時の翻訳関係者が書いた翻訳に関する本や記事、「訳者あとがき」などを調べ、翻訳に対する態度を探った。ここで問題とするのは70年代の日本の翻訳が、戦後すぐ (1950~60年代) に比べ、より日本の言語や文化・社会のノーム (規範・慣行) に合わせるようになってきたかどうか、つまり「原文に忠実な翻訳」とは、また「読者にとって読みやすい翻訳」とは何かについて、1970年代の日本の翻訳関係者がどのように考えていたのか、また実際にそのような翻訳に対する態度が変化したのかを探る。

## 2. 社会的背景

世界文明の中心—古くは中国、過去100年余りは欧米—から地理的に離れていたことも手伝って、日本は外来の思想・情報を取り入れることに大きな意義を見出してきた。外国文献の翻訳においても原書の内容を重んじるあまり、翻訳された日本語についてはそれが直訳調であっても受け入れる傾向が強かった。つまり翻訳者は原書の言語 (起点言語) の特徴をそのまま日本語 (目標言語) に移し変えて翻訳し、日本語として自然かどうかということにあまり頓着しなかった。外国から新しい文化や情報を受け入れることが国の発展にかかわる重大事だという認識から、その情報を表現する日本語そのものについての考慮が二の次になっていたと言える。

はじめに書いたように、戦後30年余りが経過し、日本が経済的・文化的にも完全な復興をなしとげた1970年代になると、翻訳に使われるべき日本語についても「直訳調の不自然で読み難い翻訳でなく、読み易く自然な日本語で翻訳する方が好ましい」という意見が以前より多く聞かれるようになった。同時に日本語論 (例: 岩波講座『日本語』1978)、日本人論 (例: 『ユダヤ人と日本人』1971)、日本文化論などに関する本も多く出版された。当時、日本語・日本文化の在り方をふまえて翻訳を論じた学者・翻訳者の紹介は本論の3. 「変化の表れ」で詳しく述べるが、その氏名と専門分野だけここに挙げておく。すなわち、柳父章 (翻訳と日本文化)、成瀬武史 (ナイダの翻訳論紹介)、別宮貞徳 (翻訳批評)、河野一郎・中村保男 (翻訳の方法) などである。1970年代、またそれ以降に出版された翻訳に影響を与えたと思われるその他の著書も、論文の最後に参考文献として挙げたので参照していただきたい。

戦後早期に見られなかった、国家としての自信回復・日本文化に対する再認識が、

1964年の東京オリンピック、1970年の大阪国際万博を経て強まり、国家として経済的に世界のトップに近づいた1970年代になって、翻訳の日本語についても新しい観点から論議されるようになったと考えられる。前記の国際的イベント（オリンピック、万博）を機に、職業としての通訳・翻訳により高い社会的地位が与えられるようになり、通訳・通訳学校が次々と創立された。バベルの前身である翻訳家養成講座が1974年、サイマルがはじめて通訳養成を開始したのが1975年（通訳教室）、インタースクールも1979年に東京教室を開設している。翻訳専門の雑誌が創刊されたのも1970年代である（『季刊翻訳』1973、『翻訳の世界』1976）。1970年代に顕著になった通訳・通訳の職業としての人気の高まりや、その商業的拡大が、翻訳に対する態度やその方法などに与えた影響も無視することはできない。

Toury (1995) の主張する「翻訳の目標文化 (target culture) における許容性 (acceptability) を探る」研究方法は、言語学系の通訳・通訳研究者が重んじてきた概念である「翻訳の等価 (equivalence)」を追求する方法とは根本的に異なっている。「原文に忠実に」という伝統的な翻訳に対する態度・考え方は、起点言語を理論の出発点としているのに対し、「ノーム」の概念は目標言語を翻訳・通訳研究の出発点としているからである。Toury に代表される翻訳の研究法—記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) は、社会から通訳者が受ける制約（文化・言語的制約をも含む）がノームとなり、それによって通訳の基準が決まるのだと考える。つまり通訳（通訳）者は、社会が認める（求める）通訳（通訳）とは何かを常に探っていないといけない（ここで言う社会とは、翻訳の読者あるいは、通訳者を使う特定のグループと規定することもできる）。

原文との等価を求めることが通訳（通訳）研究の方法ではなく、通訳の目標文化（社会）における許容性を探ることが通訳（通訳）研究の目的となるため、特異な例として『ユダヤ人と日本人』（1971）のように実際には通訳ではないが通訳を装った書物でも通訳研究の対象とすることができる。なぜなら、現在ではこの本は通訳ではないらしいということが分かっている、ベストセラーになった1971年時点の日本では通訳として出版されている以上、当時の通訳ノームを反映していると見るからである。例えば「原文に忠実な通訳・通訳」を出発点と考えてよく行なわれる誤訳批判はノームの考え方とは相容れない。特定の条件のもとで過去の時点でなされた通訳・通訳の是非（ノーム）を、現在の社会状況あるいは知識文化にのっって批判することは不毛であるからだ。すなわち、間違いがありながらも通訳として認められ、社会に受け入れられた以上、それはひとつの社会現象としての通訳ノームの例であると考えられる。こうして見ると「ノームの考えに基づく通訳・通訳研究のアプローチ」は、「言語学的な等価を求めるアプローチ」よりもずっと間口が広いことが分かっていると思う。

### 3. 変化の表れ

翻訳・通訳のノームを記述する際の方法として、翻訳・通訳文そのものを分析する方法、同じ原文を翻訳した2種類以上の訳文（翻訳の校正過程を記述しても良い）を比較する方法、また翻訳・通訳について書かれた文章（批評、論考、マニュアルなど）からノームを探る方法がある。ここでは、戦後数十年にわたる基本的な翻訳のアプローチを問題にしていることから、実際の翻訳文を分析する方法を採用すると調べる資料が膨大すぎ、時間的にも物理的にも結論を出すのが不可能に近いと、より多くの翻訳の傾向を探るには、翻訳者または翻訳関係者（翻訳出版関係者、学者、翻訳学校教師など）の意見を広く分析する方法がふさわしいと判断した。Pym（1998）が指摘しているように、翻訳について述べられた意見と実際の翻訳の結果とは必ずしも一致しないという欠点があるが、翻訳・通訳の態度について関係者が論じるということは、現実に行なわれている翻訳・通訳のノームを確認するためか古い型を破って新しい方法を模索したいからにほかならないと考えられる。

#### 3.1 訳者あとがき

本研究では、翻訳論の本や翻訳に関する雑誌記事だけでなく、資料として「訳者あとがき」を重視した。日本の翻訳ノームの変化を探るため、戦後1950年から1979年間に出版された文学、フィクション以外の一般向けのノン・フィクション（評論・エッセイ・ドキュメント・新書など）188冊の「あとがき」を調べたところ、訳者が「読者に読み易い翻訳にするように心がけた」（受け入れ側の許容性に考慮した）旨の記述があったものは、1950～60年代では全体の15%だったのに対し、1970年代になると2倍以上の33%に増えている。これは、訳者の読者に対する許容性（acceptability）を気遣う態度が1970年代になって、より一般化したことを示している。

「訳者あとがき」が原書・著者紹介などのみに終始して翻訳方法を述べていない場合には、実際の翻訳が「原文に忠実」を心がけたものだったのか「読者の読み易さ」を心がけたものだったのかは翻訳そのものを読むまで分からないことになるが、その時点で主流である翻訳方法（例：原文にあくまで忠実な翻訳）を訳者が実際に行った場合、「原書の背景などを紹介するだけ充分で、ことさら『あとがき』で翻訳の態度を取り上げる必要はない」と考えたと分析することもできる。逆に、いくら訳者が「あとがき」で「読者の読み易さを考慮した」と書いても実際の翻訳が読者にとって受け入れやすいものであったかどうかは不明である。しかし少なくとも「訳者が、読者（目標文化・社会）からの制約（ノーム）あるいは要求を感じ取って、それに対する自分の立場を表明した」と分析できる。さらに過去の翻訳の「読み易さ・自然さ」はその時点での文化・社会状況の中で評価されたものでなければならず、現在の判断基準を当てはめることはできない。過去の翻訳を今の基準で判断するのではなく、当時の翻訳批評・翻訳関係者の意見を幅広く調べて、当時の翻訳ノームを探ることが重要である。

### 3.2 翻訳関係者の意見

日本語・日本文化を念頭において翻訳を論じた柳父章は、日本で早くも 1970 年代に翻訳論を専門とした数少ない学者の一人である。柳父は『翻訳の問題』(1978)の中で翻訳の日本語について「逐語訳が原文の意味を正しく伝えていると信じられていることが問題だ」(p. 147)と指摘、従来の翻訳方法を批判している。また「原文に忠実な翻訳は、読み難いのが当たり前とする考えも問題」(p. 142)で、これは日本人が起点言語・文化(戦後、特に英米文化)が日本言語・文化より優れてと考え、その「翻訳は高度で分かり憎くて当然と考える傾向」(ibid.)に起因しているとする。さらに柳父は、当時の翻訳の主流はまだ直訳文で「あきらかに自然な日本語とは違った翻訳日本語だ」(ibid.)と指摘し、原文の言語と文化を重視する(adequacy)従来の翻訳に対する態度を批判している。柳父の視点は通訳の場合に当てはめて考えることもできるが、通訳者と翻訳者の社会的役割の違いが、どちらの文化(言語)を大切にするか大きく影響すると思われる。

1970年代当時は、日本語と文化をテーマにした言語学者、鈴木孝夫の『ことばと文化』が1973年に出版されているほか、言語学の理論にもとづいた英米の翻訳論の紹介(翻訳)も盛んだった。1970年にルーベン A・ブローワー(1959)の『翻訳のすべて』、1971年にセイヴァリー(1959)の『翻訳入門』、1972年に E. A. ナイダ(1964)の『翻訳学序説』、1973年にナイダ・テバー共著(1969)の『翻訳—理論と実際』がそれぞれ翻訳出版されている。『翻訳入門』の「あとがき」で、訳者の別宮貞徳も、「翻訳が以前よりずっと真剣に論議されるようになった」(1971, p. 254)と述べている。

翻訳によって紹介された欧米の「翻訳理論」は、当時盛んになり始めていた翻訳と言語・文化を関係付けようとする議論や、日本における翻訳・通訳理論の発展にも影響を与えたと思われる。当時の翻訳理論は、現在のように翻訳・通訳の分野をはっきりと区別して論じていたわけではない。特にナイダの「翻訳の読者にも原文の読者と同じ効果を与えること(dynamic equivalence)が重要で、一語一語の形式的言語の一致(formal correspondence)を目指すのではなく、意味優先の翻訳の方法を取るべき」(Nida, 1964)とする説は、通訳にも応用可能だ。翻訳においては、ナイダのアプローチは逐語訳が良いとする従来の考えにマイナスの影響を与えたと考えられる。このナイダの『翻訳学序説』の翻訳者でもあり、『翻訳の諸相—理論と実際』(1978)の著者でもある成瀬武史は、ナイダの理論を下敷きに言語学的見地から英日翻訳を論じた戦後初めての翻訳理論専門の学者である。日本では、翻訳に関する諸説が紹介された1970年代から、翻訳・通訳を理論的に、また語学・文化・社会的により深く追求する時代に入ったと言える。

別宮貞徳は、月刊『翻訳の世界』に1978年から20数年間、人気コラム「欠陥翻訳時評」を連載して、後にその内容をまとめたものを何冊も出版している(例:『翻訳と批評』1985、『翻訳の落とし穴』1989)。別宮の翻訳批評は1970年以前の「誤訳批

判」と違って原文の読み違いの指摘だけでなく、「欠陥日本文」つまり翻訳日本文の質も批判している。別宮は「翻訳は起点言語だけでなく目標言語にも気を配らなければならない。原書の理解だけに集中するのではなく、読者に向けて分かりやすい翻訳を心がけなければならない」と訴えた。別宮の翻訳批評コラムの人気は、1970年代以降の日本社会が翻訳に対し戦後早期の1950～60年代とは異なった期待をするようになったことを示している。つまり、外国文化や情報を珍重するあまり、翻訳文の出来・不出来にはこだわらない時代は終わり、読者の好みを考慮した翻訳を目指す翻訳の傾向がより強く表れてきたと言える。

戦後の日本における「翻訳に対する関心の変化」をつかむため、国立国会図書館の目録でタイトルに「翻訳」の語が含まれる図書を検索したところ、1950～1969年の20年間でわずか5件だったものが1970～79年の10間で15件（6倍）、その後も1980～89年で68件、1990～99年には112件と倍増を続けている。これは1970年以降、一般向けの翻訳ガイドブック、翻訳の秘訣や方法に関する本の出版が盛んになり、その状況が現在も続いていることを示している。同じように「通訳」で検索して見ても1950～60年代と比べ、1970年代以降にはかなり急激な件数の増加傾向が見られるはずだ。翻訳の手引き書に3冊以上の著作があるプロの翻訳家の河野一郎と中村保男は、1970年代から第一線の翻訳家として活動しながら、1990年代になっても翻訳指導書を続版し、翻訳学校の講師としても活躍した。両者とも、文学作品だけでなくノンフィクション、評論・広告文など、幅広く自身の経験に基づく例文を使って翻訳の秘訣や方法を紹介している。細かいテクニックについてはここで紹介しないが、翻訳の基本的姿勢として、「翻訳を目指す者が原文を理解するのは必要条件（当たり前）で、翻訳文を読者の要求する自然な分かりやすい日本語にすることが翻訳者の十分条件である」としている。そして、プロの翻訳家になるには後者の条件を満たしていなければ失格だと説く。

翻訳・通訳を志す者が読むガイドブックの内容は社会の期待を反映しているはずだ。通訳・翻訳家として有名で、しかも通訳・翻訳学校の講師を務めたり指導書を出版したりして、世間に認められたプロの意見は、社会の通訳・翻訳に対する認識や態度を変える力になると考えられる。1970年代以降から現在まで出版され続けてきた指導書の著者や通訳・翻訳学校の講師が推薦する業界テクニックが、現在の通訳・翻訳の態度に影響を与えていると考えられる。翻訳について言えば、1970年に始まった傾向である「原文だけを重視するのではなく、受け入れ側の読者への配慮—自然で読み易い翻訳文を提供すべき」という目標文化（言語）の許容性を考慮に入れた主張が、現在も日本の社会を説得し続けていると考えられる。逆に言うところ「原文に忠実なだけで、読み難い翻訳」がまだ根強く残っているから「目標文化（読者）を考慮した・読み易い日本文を！」という主張が未だに繰り返されているとも言える。

#### 4. 結び

外来文化に対するあこがれ、また「欧米に追いつけ・追い越せ」のようなスローガンに見られる「先進文化・経済・技術情報を重視する国家・国民的メンタリティー」を背景に、日本の従来の翻訳に対する態度は「あくまでも原文に忠実に」という起点言語（文化）を重視するアプローチであった。しかし1970年を境に日本では翻訳に対する態度に変化が表れ始めた。その背景には、戦後30年を経た日本が社会的にも経済的にも自らが先進国に仲間入りするほど成長し、もはや外国からの「先進」文化・情報をただがむしゃらに輸入（翻訳）する時代ではなくなったという時代背景がある。新しい翻訳・通訳の傾向として、国際化にともなった外国との友好関係を保つための情報交換、日々の生活に役立つニュース、一般向けの経済情報、娯楽・行楽情報など内容の軽いものが主流になってきたこともその理由となろう。翻訳・通訳の一般化傾向に伴って、いわゆる実務翻訳分野の翻訳・通訳者の需要が増えて、以前のように大学教授や学者が片手間に外国からの新しい文化・情報を紹介するといった方式でなく、より一般的な職業としての翻訳・通訳業界が生まれた。社会的な翻訳に対する期待感も、以前のように「直訳調で分かりにくい、重要な情報なのだから我慢する」という原文重視の考え方から、「読み易い日本語に翻訳されていなければ意味が分からない」といった読者・目標言語（文化）を重視する意見が主流になってきた。

こうして見ると、経済発展とそれに伴う国際化、その結果としての実務的翻訳・通訳の増加と大衆化が、翻訳に対するアプローチや態度の変化の一因となったことがわかる。学術・専門分野など文化・技術の先端分野の通訳・翻訳では、起点言語重視の方法が今でも好まれていることも考えられるが、本論で取り上げたのは一般書（ノンフィクション）の翻訳であり、この分野では1970年代以降、明らかに目標言語（文化）が以前より重要視されるようになった。言い換えると、戦後早期、1950年～60年代の翻訳者は学者・専門家が主流であったこともあって、原文（起点言語・文化）を重視する翻訳が行なわれていたが、1970年代から一般書の翻訳において次第にジャーナリストや翻訳を専門的職とするプロが増えて、商業的要求もふまえて、原文の一字一句にこだわるより、読者の期待感にあわせる翻訳の態度が主流になってきたと言える。同じように、通訳の態度が起点言語（文化）と目標言語（文化）のノームの視点から、1970年以降の日本でどのように変遷してきたのかを研究するのも興味深い課題だと思われる。

\*

この論文では、Toury (1995) の翻訳論の主題である「基本的ノーム」を中心に、1970年代における日本の翻訳に対する態度の在り方とその変化の内容を探った。また1998年の通訳理論研究会ジャーナルに「研究課題の報告」として掲載した「Gideon Toury の翻訳理論と英・日翻訳」の4年後の成果報告も兼ね、来年提出予定の博士論文「戦後日本の翻訳ノーム」の一部（第4章）を抜粋的に紹介した。開国から明治に

かけての日本の翻訳とその歴史的背景、漢文訓読が逐語訳（直訳）に与えた影響、および日本語自身が翻訳の影響を受けて発展してきた事実（例:翻訳調の社会的容認）なども博士論文の第三章で取り上げているが、「通訳理論研究」の記事としては、あまりに翻訳にかたよりすぎるので「変化の表れた 1970 年代」に焦点をあて、部分的にはあるが読者に考えるきっかけを作ったつもりである。

[註] 本論の中心的な概念である「ノーム (norms)」の日本語訳について [規範] とすると、その規制の意味が強く聞こえ、[慣行] とすると意味は原語に近いが conventions の訳語との区別がつかなくなるため、ここでは「ノーム」のまま紹介しているが、論文の内容から本来の意味を把握していただきたい。上記以外に、文脈によってもっとこなれた日本語で「型」「モデル」などの訳語も考えられるが、あまり具体的な表現を使うと文脈から単語だけを取り出した場合、誤解されるおそれがあるので注意が必要である。

---

著者紹介：古野ゆり (Furuno Yuri) NAATI (オーストラリア国家検定局) 認定英日翻訳士。現在、Griffith 大学にて「翻訳・通訳基本理論と実際」講師。Queensland 大学にて「日本語 I」非常勤講師および博士課程在籍中（専門：英日翻訳論）。  
E-mail: < s088727@student.uq.edu.au >

---

#### [参考文献]

- 別宮貞徳 (1975) 『翻訳を学ぶ』八潮出版  
岩波講座 (1978) 『日本語・別巻－日本語研究の周辺』岩波書店  
河野一郎 (1975) 『翻訳上達法』講談社  
河野一郎 (1982) 『翻訳教室』講談社  
中村保男 (1973) 『翻訳の技術』中央公論社  
中村保男 (1983) 『翻訳はどこまで可能か』The Japan Times  
成瀬武史 (1977) 『翻訳の諸相－理論と実際』開文社出版  
日本科学技術翻訳協会訳編 (1970) 『翻訳のすべて』(ルーベン・A. ブロアー編) 丸善  
清水幾太郎 (1976) 『日本語の技術』ごま書房  
多田道太郎 (1978) 『日本語と日本文化』朝日新聞社  
柳父章 (1976) 『翻訳とは何か－日本語と日本文化』法政大学出版  
柳父章 (1978) 「翻訳の問題」『日本語・別巻－日本語研究の周辺』(pp. 129-145)  
柳父章 (1978) 『比較日本語論』日本翻訳者養成センター  
横井忠夫 (1971) 『誤訳・悪訳の病理』現代ジャーナリズム研究会  
Harris, B. (1990). Norms in Interpretation. *Target 2*: 1. 115-119.

- Kondo, M. and J. Wakabayashi (1998). Japanese Tradition. In M. Baker & K. Malmaakjaer (Eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (pp. 485-494). London and New York: Routledge.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating, with Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- Pym, A. (1998). *Methods in Translation History*. Manchester: St. Jerome.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.